

Title	亀ヶ岡文化における内面渦状土(石)製品とその分布
Sub Title	The clay and stone objects with spiral motifs in Kamegaoka (亀ヶ岡) culture
Author	稲野, 裕介(Inano, Yusuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.2 (1982. 9) ,p.149(313)- 158(322)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820900-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

亀ヶ岡文化における内面渦状土(石)

製品とその分布

稲野 裕介

I はじめに

亀ヶ岡文化を構成する遺物には、容器としての土器、日常生活を維持する道具としての石器類の他に、種々の土製品・石製品の存在が知られている。これらのなかには土偶・土版・耳飾・石剣類・岩偶・岩版・独鈷石・玉類などがあり、このうち装身具と推定されるものを除けば用途の推定しがたいものばかりである。しかもこれらの遺物はそれぞれ若干の時間的・空間的な偏りはみられるものの、これまで多くの遺跡で出土してきているものである。

一方、上記の普遍的とも言える遺物に対して、きわめて限定された遺跡でのみ出土する遺物が存在することも、亀ヶ岡文化の特徴の一つと言えよう。これらの遺物は報告例も少なく、なかには名称すら一定していないものもある。

本稿において検討を試みる内面渦状土(石)製品もその一つである。本製品は弯曲した円盤の内面に渦巻状の貼付(石製の場合は

亀ヶ岡文化における内面渦状土(石)製品とその分布

彫刻)を行ない、また製品のほぼ中央すなわち渦巻の起点に貫通孔を穿ち、さらに渦巻の終点は製品の外縁にややみ出すことを特徴とするものである。なお本製品の名称については後述するようにな種々のものがあり、現在なお一定していないが、筆者は弯曲の内面に渦状の加工が行なわれていることを本製品の最大の特徴として考え、「内面渦状土(石)製品」の名称を用いることとする。

II 研究のあゆみ

これまで内面渦状土(石)製品の紹介が行なわれたことは稀であり、これに対するの論考は殆ど行なわれていない。また名称についても一定したものが与えられていない現状である。そこで過去の研究の流れの中で、本製品がどのように取扱われてきたかを振り返ってみると、大きく次の二つの時期に分けることができよう。

第一期(一九二〇〜一九三〇年代) この時期は青森県是川中居遺跡が多量の亀ヶ岡式土器及び諸遺物、特に有機質遺物を出土する遺跡として注目された時期である。一九二九年には大山史前学研究所による発掘調査が行なわれ、またこれと前後して杉山寿栄男らによって出土遺物の精力的な集成や紹介が行なわれ(杉山一九二八、喜田・杉山 一九三二)、これらの杉山らによる作業の過程で、本製品が紹介されたのである。杉山は是川中居遺跡出土の二点の本製品について、法量を示した上で次のような記述を行なっている(杉山 一九二八)。

「内面渦状をなせる二個の小皿形土器。渦の起点に小孔を穿つ。外面は滑なり。この器は二個組み合されて出土せるものにして、他にも当遺跡に於て単独に発見されしものあり。他遺跡に於ける発見の例を知らず。縁部一ヶ所に存する喰合部は同一方向にして両者喰合さず。渦巻状に製せる際に生ぜる端をそのままに存せるもの。」

杉山は「内面渦状をなせる小皿形土器」という写実的な名称を冠し、さらに本製品が二個組合されて出土したというきわめて重要な記録を残した。またこの時期には他遺跡の類例は未だ知られておらず、是川中居遺跡出土の資料にしても同一方向の渦巻のものだけが発見されていたようである。

これより後に喜田貞吉と杉山は、本製品に対して「渦巻形土器」の名称を使用した(喜田・杉山 一九三二)。いずれにせよ本製品の特徴として「渦巻」という特異な形状を重視していたことが第

一期の特徴と言えよう。

第二期(一九六〇年代) 本製品をイモ貝製垂飾品を模したものとみなす時期である。杉山らによる紹介が行なわれてから、約三〇年間本製品が取りあげられることはなかった。しかしその後、江坂輝弥は、愛媛県上黒岩遺跡から発掘された「イモ貝の殻頂を磨いて製作した円板状の垂飾品」を紹介し、東北地方で出土する本製品(是川中居・蒔前台遺跡出土資料)をこれらの模倣として、写真によって示した(江坂 一九六四b)。また清水潤三は「イモ貝状の土製品」の名称を初めて是川中居遺跡出土資料に対して用いた(清水 一九六六)。さらに大高興は青森県宮田遺跡出土資料に対して「イモ貝製品を模した土製品」という名称を使用した(大高 一九六九)。

本製品をイモ貝(製品)の模倣とみなす名称はこの時期より用いられ、現在もなお有力である。またこの時期には二・三の遺跡出土の類例が紹介されたが、いずれも土製品であり、石製品の紹介は未だ行なわれていない。

近年では町田章が岩手県蒔前台遺跡出土資料に対して「ボタン形の土製品」の名称を用いているが(町田 一九七九)、一般的な名称となるに至っていない(註1)。また穴沢味光は本製品を「イモ貝の殻頂で作った鈕をモデルにした土製品」と称し、古墳時代の碧玉製紡錘車の祖形とみなす見解を示している(穴沢・西岡 一九八一、註2)。

III 資料の検討

次に筆者が集成を行なった五遺跡一九点の内面渦状土(石)製品についての観察所見を遺跡ごとに述べ、さらに大きさに関する検討を加えることとする。なお正式の発掘調査による出土例は一例もなく、出土状態等については不明な点の多いことを断っておく。また、個々の資料の計測値等は第一表に、実測図を第一図に示したがこれらの作成にあたっては、以下の基準を設けた。

- ①第一表、第一図の番号は共通している。
- ②渦巻の方向は中心孔から外縁へ向けて、時計回りに進むものを右巻、これと逆を左巻とした。
- ③長径は中心孔と渦巻の末端を結ぶ軸上に、短径はこれと直交する軸上に求めた。
- ④重量の計測にあたっては、遺跡によって用いた器具が異なっている。
- ⑤細かい剝落等は無視して復元実測を行なった。

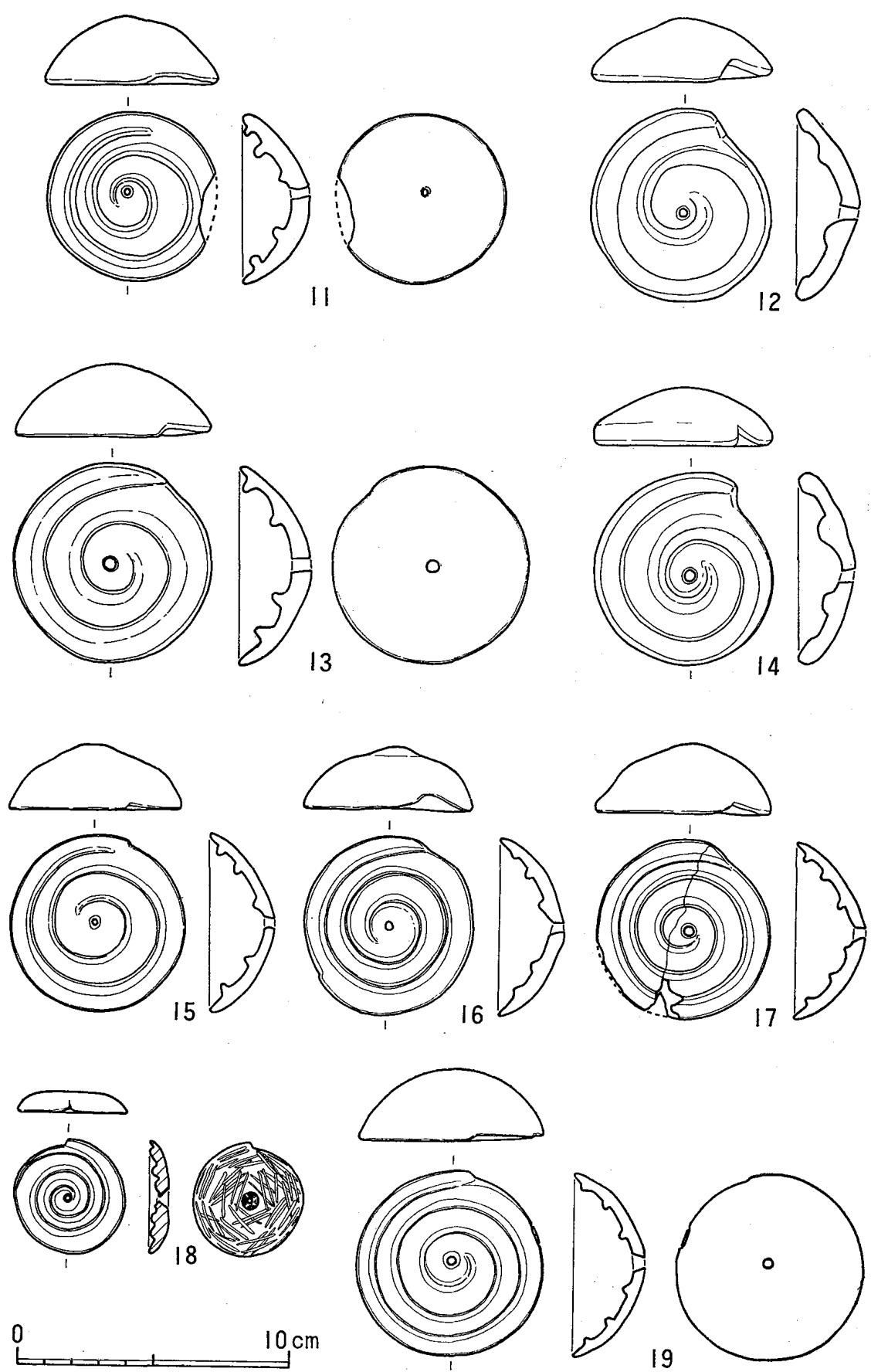
。北海道女名沢遺跡(①)③)
 三点が出土しているが、いずれも石製、左巻となる。
 ②は大きく欠損している。③は、内面には①・②と同様の渦巻が刻まれているものの外面には未成形の面を残しており、製作途上のものと考えられる。仮に③を未成品とすれば、本遺跡においては内面の彫刻→外面の整形と

亀ヶ岡文化における内面渦状土(石)製品とその分布

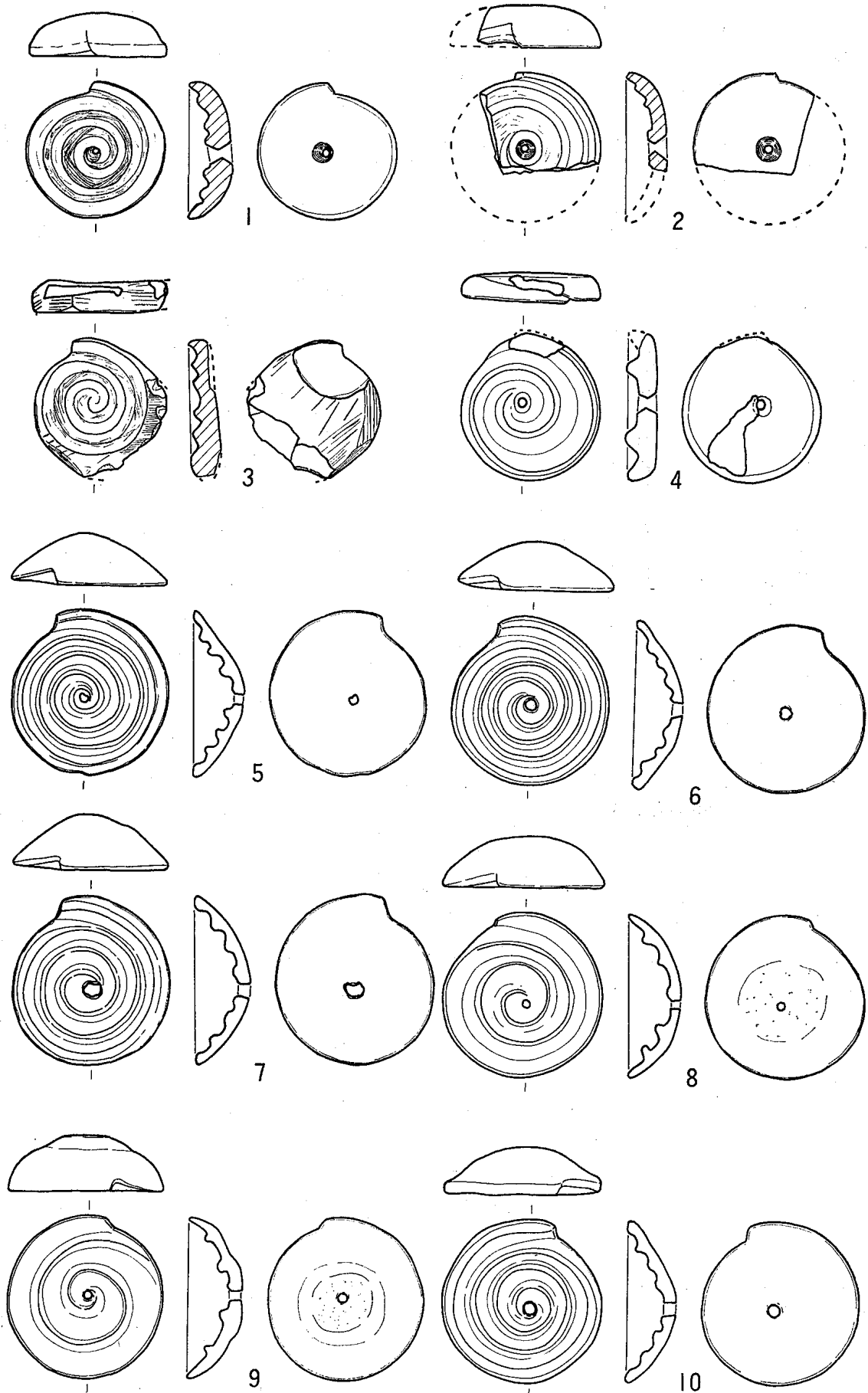
第1表 内面渦状土(石)製品一覧表

()は現存値

番号	県	市町村	遺跡	材質		渦の方向		長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	所蔵者
				石	土	左	右					
1	北海道	函館市	女名沢	○		○		5.1	5.1	1.6	25	函館市立博物館
2			"	○		○		(3.8)	4.5	1.5	(10)	"
3			"	○		○		5.1	5.0	1.1	25	"
4	青森	青森市	宮田		○	○		(5.4)	5.1	1.1	(20)	青森県立郷土館
5		八戸市	是川中居		○	○		6.1	5.8	1.9	23	八戸市教育委員会
6			"		○	○		6.2	5.8	2.0	27	"
7			"		○	○		6.2	5.8	1.8	26	"
8			"		○	○		6.1	5.9	1.9	26	"
9			"		○		○	6.0	5.7	2.0	26	"
10			"		○		○	6.0	5.8	1.8	25	"
11			"		○		○	6.2	(6.1)	2.5	(44)	"
12			"		○		○	7.0	6.6	2.3	47	"
13			"		○		○	7.2	7.2	2.6	56	"
14			"		○		○	7.0	6.6	2.1	49	"
15	岩手	一戸町	蒔前台		○	○		6.5	6.3	2.4	約30	本宮将
16			"		○	○		6.5	6.2	2.4	約30	"
17			"		○	○		6.4	6.4	2.6	約30	"
18	秋田	小坂町	内岱	○		○		4.1	4.0	0.7		慶応義塾大学 民族学考古学研究室
19	—	—	—		○	○		6.2	6.8	2.6	27	八戸市教育委員会



製品実測図



第1図 内面渦状土（石）

いった製作工程を想定することができる。

。青森県宮田遺跡(④)

わずかに一点のみが保存されている。土製で左巻となる。他遺跡出土のものと比較してみると、全体に粗雑な作りで部分的に欠落もみられる。また他遺跡出土のもののような内弯も殆どみられず、円盤に近い形状となる。さらに中央の穿孔は両面からなされており、ある程度の乾燥の後に穿たれたものである。

。青森県是川中居遺跡(⑤~⑭)

一〇点の資料に接することができた。全点土製であるが、四点は左巻(⑤~⑧)、六点が右巻(⑨~⑭)と左右両方向が混在し、右巻が若干多くなる。また、⑦全体に薄手で緻密な作りのもの(⑤~⑩)と、①重厚な作りのもの(⑪~⑭)と二種の作風が存在する。また⑩は渦巻の末端が外縁にはみ出さない異例のものである。

。岩手県蒔前台遺跡(⑮~⑰)

三点の資料に接することができた。全点土製で、右巻となる。三点とも全体に薄手で、是川中居遺跡の⑦の作風(⑤~⑩)と近似するものである。

。秋田県内岱遺跡(⑱)

一点のみが保存されている。石製で左巻だが、他遺跡のものと比較して小形・扁平である。外面には整形の痕跡を残している。

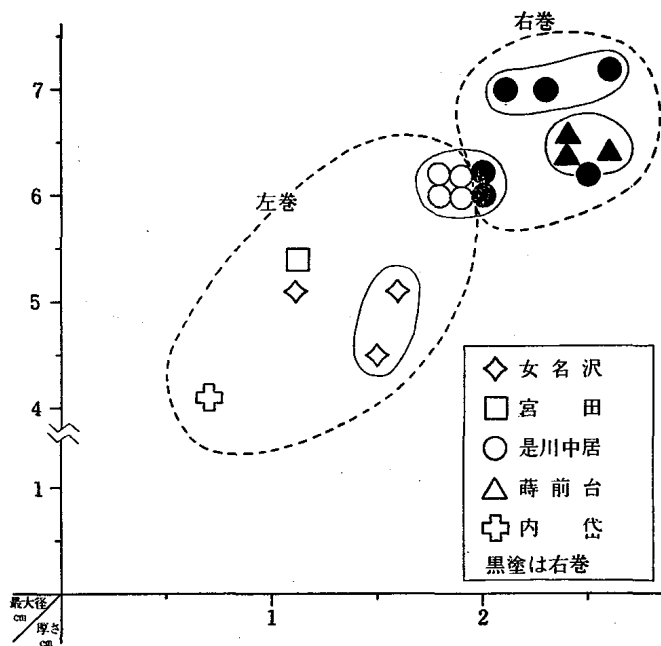
。出土地不明(⑲)

土製で右巻である。比較的薄手で、是川中居遺跡の⑦の作風に近いものである(註3)。

以上の一九例についてみると、まず内面渦状土(石)製品には土製と石製の二種、また右巻と左巻の二種の存在を指摘することができる。

さらにここでは、大きさに関する検討を加えることとし、縦軸に長径、横軸に厚さをとり第二表を作成した。まず第二表を見ると、本製品には種々の大きさのものが存するが、二点以上出土している遺跡(女名沢・是川中居・蒔前台)に注目すると、それぞ

第2表 内面渦状土(石)製品の大きさ



れの遺跡ごとにほぼ一定の大きさにまとまることを指摘することができる。ただし是川中居遺跡では二つのまとまりが認められる。さらにこれらを大きくまとめると、是川中居と蔦前台の両遺跡が他遺跡と比較して大形であると言えよう。

一方、第二表で右巻のもの（黒塗り）と左巻のもの（白ぬき）を比較してみると、右巻は大形、左巻は小形と二つに分かれることが指摘されよう。また、左右両形態の混在する是川中居遺跡はその接点に位置しており注目される。

IV 分布および所属時期

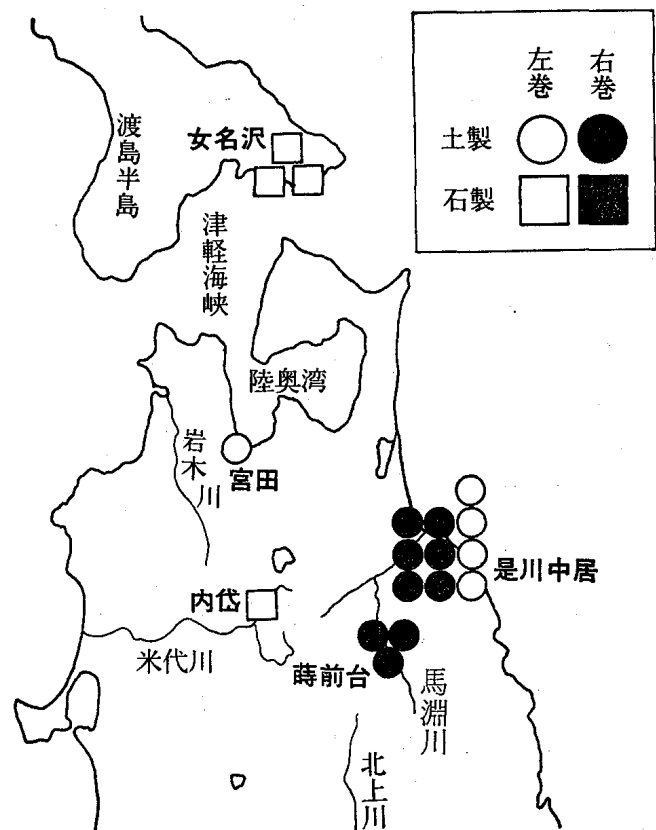
Ⅲで本製品の材質・形態にそれぞれ二種の存することを述べた。ここではこれら材質・形態の差がどのような分布および所属時期を示すのか考えてみたい。

最初に分布について述べることにする（第二図参照）。

まず材質に関してみると、土製のものは蔦前台・是川中居遺跡など岩手県北部から青森県東部にかけて流れる馬淵川流域で多く出土するのに対し、石製のものは、女名沢・内岱遺跡と本製品の分布圏の周辺で出土している点が注目される。

また形態に関しては、左巻のものが本製品の分布の範囲とほぼ一致するのに対し、右巻のものは馬淵川流域という限られた地域で出土している。さらにこの馬淵川流域に限ってみると、中流域の蔦前台遺跡では全点が右巻となるのに対して、下流域の是川中居遺跡では左右両形態が混在している。同流域を右巻の分布圏とすることができるなら、左右の混在する是川中居遺跡よりも蔦前

亀ヶ岡文化における内面渦状土（石）製品とその分布



第2図 内面渦状土（石）製品の分布図

台遺跡すなわち馬淵川中流域をその中心とすることが可能であろう。

次に所属時期について述べるが、本製品が縄文時代晩期の遺跡から出土することはこれまでも知られていた。しかし先にも触れたように共存する土器が不明確なために、土器型式との対比が困難である。そこで本製品の出土した遺跡のこれまでの報告等を参考として、本製品の所属時期を限定してみたい。

まず北海道女名沢遺跡は縄文時代晩期中（末葉（大洞C₁）A式）を主体とする遺跡である。一方、青森県宮田遺跡では晩期中葉の

土器だけが報告されており(清水 一九五一)、同県是川中居遺跡は晩期全般に亘る土器を出土しているため時期の決定は容易でない。また岩手県蒔前台遺跡は晩期前半(大洞B、C₁式)の土器が報告されており、後半に属するものは皆無であると言つ(小田野 一九六九)。さらに秋田県内岱遺跡は縄文時代前期の岩偶を出土したことで有名であるが、晩期の遺物に関しては明らかではない。

このように本製品が亀ヶ岡文化に伴うことは確実とは言つものの、土器型式との対比は必ずしも一様ではなく、遺跡によって異っているものと言えるであろう。

ところで上記の各遺跡のうち、時期の限定できないものを除外して、さらに編年的にならべてみると、蒔前台↓宮田↓女名沢すなわち馬淵川中流域↓陸奥湾↓渡島半島の順となる。先に筆者は右巻の製品の分布の中心を馬淵川中流域に求めたが、上述の編年を併せて考えると、本製品の初現形態(土製・右巻)は馬淵川中流域に求められ、しだいに北へ分布圏を拡大し、その過程で材質を土製から石製、形態を左巻へと変化させていったものと考えられる。さらにその過程で製品の小型化の傾向をも指摘することができるであろう。

V まとめと展望

本稿において、筆者は内面渦状土(石)製品について次のことを述べてきた。

一、内面渦状の製品には土製のものと石製のものの二種が存す

るが、馬淵川流域ではすべて土製であり、周辺地域で石製となる。

二、同様に右巻のものと左巻のものの二種が存し、このうち右巻のものは馬淵川流域に限って分布が認められる。

三、本製品の大きさには種々のものがあるが、遺跡ごとに一定の範囲にまとまる。さらに右巻のものと左巻のものを比較すると右巻のものが大形である。

四、本製品は縄文時代晩期前半の馬淵川中流域に初現が求められ(土製・右巻)、しだいに北へ分布圏を拡大しつつ材質を土製から石製、形態を右巻から左巻へと変化させていったものと考えられる。

ところで本製品は同一の形態を土・石という二種類の材質で作したのだが、亀ヶ岡文化におけるこのような「異材同形態」の関係にあたる遺物には岩版と土版、石冠と石冠状土製品、岩偶と岩偶形土偶などが知られている。これらの遺物の材質がどのような背景で変化したのかは、現在のところ明らかにはできないが、岩版は時間的な流れの上で土版と交替し(天羽 一九六五)、石冠・岩偶はそれぞれの分布圏の周辺で数点の同形態の土製品が発見されている(橋本 一九七六・稲野 一九八一)。しかし岩版・石冠・岩偶の三例とも石製から土製への変化であるのに対し、本稿で取扱った内面渦状土(石)製品は土製から石製への変化として考えられ稀有な例であろう。

また岩版は、初現形態が馬淵川流域に求められ(天羽 一九六

五)、岩偶も同地域に分布の中心が考えられているが、これらは同地域でその素材となる凝灰質泥岩が求めやすいことによるといった説明が行なわれている(江坂 一九六四a)。ところが本製品はこれとは逆に、最初に土製品が製作され、馬淵川流域を離れたのちによく軟質の石材で製作されており、同流域で容易に入手できる石材は利用されていない。このように内面渦状土(石)製品の場合、岩版や岩偶と異なり、その材料の選択にあたっては単に入手の容易さだけでは説明できないものと言えよう。

さらに、岩版は馬淵川流域で発生し、南方に分布圏を拡大して関東地方まで到達するものの、北方への展開はあまり見られず、津軽海峡を渡ることではできなかった(天羽 一九六五)。これに対して、やはり馬淵川流域に発生の考えられる内面渦状土(石)製品は、南方への展開は殆どみられないものの、津軽海峡を越えて渡島半島まで到達しており、発生ののちに岩版とは異なった展開を示している。

本稿ではこれらの問題を論ずる余裕はないが、「異材同形態」と「分布圏」の問題は、亀ヶ岡文化を説明する上で興味ある問題であり、機会を改めて取りあげる予定である。

本稿作成にあたり、資料の集成に協力していただいた千代肇・鈴木克彦・工藤竹久・蒔田健・本宮将・赤沢威の各氏、函館市立博物館・青森県立郷土館・八戸市教育委員会・八戸市歴史民俗資料館・東京大学人類学教室・慶応義塾大学民族考古学研究室の諸機関、種々の御教示をいただいた清水潤三・江坂輝弥・穴沢味

亀ヶ岡文化における内面渦状土(石)製品とその分布

光・鈴木公雄・小林達雄・藤村東男の各氏に感謝申上げる次第である。

註

(1) 亀ヶ岡文化に伴う遺物の中で、二孔を有する小形・扁平の石製品に対して「ボタン状石製品」と称することが一般的であり、本製品に対しては適切な名称とは言いがたい。

(2) イモ貝製垂飾品は愛媛県上黒岩遺跡(縄文時代早期)、熊本県轟貝塚(縄文時代早前期)、鹿児島県広田・佐賀県大友遺跡(弥生時代)など主に西南日本の遺跡からの出土例が知られている。このように、現在のところ、いずれも東北地方縄文時代晩期とは時間・空間的に隔りが大きく、これらのイモ貝製垂飾品と本稿で取扱う内面渦状土(石)製品をただちに結びつけることは困難であろう。そのために本稿では一般に用いられること多い「イモ貝状の土製品」の名称を使用しなかったのである。しかしイモ貝製垂飾品の中に、内面渦状土(石)製品と酷似するものが存在することも事実である。この問題に関して、西南日本と亀ヶ岡文化を結びつけるような類例の発見を待つこととし、本稿では亀ヶ岡文化に関するものだけに限って論ずることとした。

(3) ⑬は八戸市の故今淵正太郎旧藏品だが、同コレクションには八戸市を中心に馬淵川流域の出土品が多い。従って⑬もこの地域の出土の可能性が高いものと言えよう。

文献

天羽利夫 一九六五 亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究(史学 第三七卷四号)

穴沢味光・西岡秀雄 一九八一 田園調布宝来山古墳の研究(史誌 一五号)

江坂輝弥 一九六四 a 岩偶と岩版(『日本原始美術 二 土偶・装身具』)

同 一九六四 b 貝・石製垂飾品(『日本原始美術 二 土偶・装身具』図版解説)

橋本 正 一九七六 御物石器論(大境 第六号)

稲野裕介 一九八一 岩手県岩手町豊岡遺跡出土の岩偶形土偶(考古風土記 第六号)

喜田貞吉・杉山寿栄男 一九三二 『日本石器時代植物性遺物図録』

町田 章 一九七九 『日本の原始美術 九 装身具』

清水潤三 一九五一 青森県東津軽郡宮田遺跡(日本考古学年報 四)

同 一九六六 『是川遺跡』(中央公論美術出版美術文化シリーズ)

杉山寿栄男 一九二八 『日本原始工芸』

小田野哲憲 一九六九 岩手県蔭前台区遺跡出土の晩期縄文式土器について(遮光器 二号)

大高 興 一九六九 『縄文文化遺物集成』

〔追記〕

脱稿後、次の二点を知った。

。青森県弘前市十腰内遺跡出土品(東京大学人類学教室所蔵) 径約5cm、土製で左巻となる。

。岩手県盛岡市蔭内遺跡出土品(岩手県埋蔵文化財センター 一九八二『蔭内遺跡』岩手県埋蔵文化財調査報告書第三集、四八一頁 図版五八一―a)

径約6cm、厚さ約3cm、石製で左巻、中央の穿孔はみられない。本資料は正式の発掘調査で出土した唯一の例だが、これに関する記述が行なわれていないため出土状態等は不明である。また出土土器の大半が整理中とのことであり、今後の整理によって本製品の所属時期を知ることができるであろう。